

本物の研究

世の中の活動には“仕事”と名づけられるべきものと“研究”と名づけられるべきものがある。仕事は十の努力に対して十の成果があがる。研究は、百の努力に対して成果がゼロのときもあれば、一の努力に対して百の成果があがるときもある。研究計画とか研究管理ということほど無意味なことはない——むろん研究という名のついている仕事は世の中には多いから、その限りでは、有意義かも知れない。

仕事はグループでやれば効率があがるかも知れないが、研究はあくまでも個人が、自由の中で、やるべきものである。個人の魂と思想が生きたものでなければならぬ。その意味で多分に芸術のにおいがする。企業や軍や政府がスポンサーとなる、お金はあっても、自由のない研究は、長い眼でみて、人類に良い影響は与えないだろう。

仕事での失敗は許されないが、研究は失敗の連続である。多くの人が、多くの時間と努力をかけて、成功はきわめて運のいい人の、ほんの一瞬にすぎない。そしてそこには貫くような心の喜びがある。これは数億の精子のうち卵に入ることのできるものは唯一つであるという自然の摂理に似た現象かも知れない。そしてそこから仕事が始まる。

数学者阿瀬先生の“紫の火花”（朝日新聞社）から、先生の研究の様子を引用してみよう。「私はどんな小さな手掛りでもよいから発見したいと思って、暗がりでも物を探り当てるような探索を始めた。私の連想力、想像力、構想力を総動員していろいろ“実験”した。実験とは、数学的自然がもしそうなっているなら、この特別な場合はこうでなければならないはずである、と思索の中で追い詰めておいて、その特別な場合を具体的に調べてみることである。（中略）実験はこれまで1度ももうまくいったことはないが、それは少しも今日もうまくいかないという証拠にならない。そう思っておもむろに新しい構想を立てる。立てても立てても決して成功しないのだが、飽きずにそれを繰り返す。そんなことが三月ほど続いた。そうすると、構想の立て方がまったくなくなってし

まったのである。」

こうして先生はその後さらに三月ほどやることなく眠ってばかりいたが、ある朝「頭が自然に1つの方向に動いて、それがだんだんはっきりしてきて、どこからどう手を着けていけばよいか明瞭にわかってしまった。時間はよくわからないが一番初めから数えて2時間あまりたったのだろうか。発見特有の鋭い喜びは、その日1日中続いた」

こうして研究者の生涯のうち本物の論文が書けるのは、天才は別として、多くは1編か2編にすぎない。こんな頼りないものに生涯をかけるというのは、どうみても利口な人のやることではない。寺田寅彦先生も、研究者というものは半分馬鹿なところがなければならぬと言っておられる。およそ巧利的、合理的、経済的な考えからはその動機は生まれてこない。その動機は、対象への興味とか愛着とか、なによりも理想と追究する情熱なのである。理想がなければ、観念の遊戯と区別がつきにくい。そしてこれこそが文化というものの支えになる。そして文明はこの基礎の上に咲きほこるのでなければならない。

このように真の研究というのは、創造の喜びを目的とする心の問題であり、客観性も実利性もない。だから政治、企業、社会、軍事などには直接的には役に立たない。役に立つのは研究が仕事に移行したときからである。真の研究者は研究費が多く出て、現在脚光をあびている問題に殺到したり、まして業績をあげて就職条件をよくするために、論文を書くようなことはしない。こんなことを多くの人々がやり出すと、見ただけでうんざりするような論文が氾濫し、「学問はまるでいなごの大群におそわれた畑のように惨憺たる有様になってしまう」のである。

この原稿を書いているとき、はからずも真の研究者の一人湯川秀樹博士の訃音に接した。先生は「夜考えて、昼計算する」と言っておられた。真の研究者は24時間勤務なのである。謹んで先生の御冥福を祈りつつ筆をおく。

(τ)